

帝京科学大学教員



おすすめの本

どの本から読んでみる？



CONTENTS

人生について2	専門を語る14
津田 彰 先生 (医療福祉学科 / 総合教育センター)	近藤 保彦 先生 (アニマルサイエンス学科)
古川 雄祐 先生 (医学教育センター)	濱田 淳 先生 (東京柔道整復学科)
豊田 輝 先生 (東京理学療法学科)	野田 英樹 先生 (アニマルサイエンス学科)
	岩花 倫生 先生 (アニマルサイエンス学科)
思考・意識を刺激する4	人間の尊厳17
小黒 正幸 先生 (東京柔道整復学科)	永沼 充 先生 (学校教育学科)
小山 優美子 先生 (東京理学療法学科)	田口 直子 先生 (幼児保育学科)
舟喜 晶子 先生 (柔道整復学科)	
稲川 健太郎 先生 (教職センター)	きっかけはここに!?18
園山 真由美 先生 (看護学科)	杉浦 芳則 先生 (教職センター)
米田 巖根 先生 (学校教育学科)	今野 晃嗣 先生 (アニマルサイエンス学科)
	藤原 敬介 先生 (総合教育センター)
力を抜いて元気をもらう8	長谷川 辰男 先生 (作業療法学科)
高谷 光 先生 (生命科学科)	馬場 千秋 先生 (学校教育学科)
渡邊 修司 先生 (理学療法学科)	
明日への希望10	小説・文学21
下岡 ゆき子 先生 (自然環境学科)	寝占 真翔 先生 (教職センター)
永沼 充 先生 (学校教育学科)	三尾 真琴 先生 (総合教育センター)
大場 卓 先生 (教職センター)	近藤 保彦 先生 (アニマルサイエンス学科)
	富田 圭佑 先生 (柔道整復学科)
外国を知る12	梶井 正紀 先生 (こども学科)
山田 健司 先生 (医療福祉学科)	
松永 美輝恵 先生 (医療福祉学科)	季節を味わう24
馬場 千秋 先生 (学校教育学科)	持田 尚 先生 (学校教育学科)
	ばくもと さん (図書館)

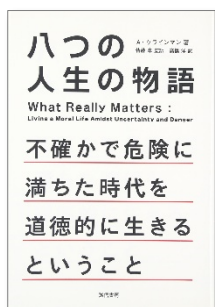
人生について

不確かで危険に満ちた時代を 道徳的・人間的に生きるということ



医療福祉学科 / 総合教育センター
津田 彰 先生

『八つの人生の物語 不確かで危険に満ちた時代を道徳的に生きるということ』
A・クラインマン著 高橋洋訳 誠信書房 【請求記号：493.7/K14】



本書は20年ほど前の書であるが、コロナパンデミックやウクライナ戦争など、安全・安心が脅かされる現在の世界情勢の中に生きる私たちを想定したかのように「不確かで危険に満ちた時代を道徳的・人間的に生きるということ」とは何か問いかける。ごく普通の人びとが人生途上に現れた危機や不確かな状況（愛する人の死、不公平、差別、失業、事故、慢性的な病など）に追い込まれ、自分が築き上げてきた人生の意味を突然問い直させられながら道徳的・人間的体験を生きた人物の物語である。

自分の運命は自分がコントロールしているという感覚が打ち砕かれそうになったときの知識を得るための書ではない。私たち自身の人生の営みに染み入るような思考を求めてくる。VUCAの時代「真にかけがえのない人生を生きるために何が大切なのか」と問いかける。それに対する普遍的な答えはなく、それぞれがそれぞれの人生において真剣に考えていくテーマとなることを教えている。





医学教育センター
古川 雄祐 先生

博士の静かな日常、 はたまた...



『生命科学者たちのむこうみずな日常と華麗なる研究』
仲野徹著 河出書房新社 【請求記号：460.28/N39】

皆さんは科学者や研究者と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべるでしょうか？ 勿論、本学にもたくさん素晴らしい科学者・研究者がいらっしゃるのですが、ポジティブなイメージをお持ちの方も多いと思います。ただ、一般的には良くも悪くも変わった人を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか？

今回ご紹介する『生命科学者たちのむこうみずな日常と華麗なる研究』には、期待を裏切らない変わった研究者像が、著者である大阪大学病理学・仲野徹教授の軽妙な分かりやすい語り口で生き生きと描写されています。日本の科学者としては、かつては道徳の教科書に取り上げられていた野口英世博士や文筆家としても有名な森鷗外博士のエピソードがとくに強烈で、人間としてのマイナス面も遠慮なく披露されており、現在のコンプライアンスの考え方からすると驚くこと必至です。一方、常識から逸脱した方ばかりでなく、人間的にも素晴らしい科学者もたくさん紹介されています。サルバドール・ルリア博士は常に研究のことを考えている研究者の鑑で、土曜日の夜にスロットマシンで遊んでいて細菌の突然変異のメカニズムを思いつきました。このことも驚きですが、その後の展開がさらに凄いのです。他にも面白く美しい話がたくさん紹介されていますので、ぜひ手に取ってみてください。



東京理学療法学科
豊田 輝 先生

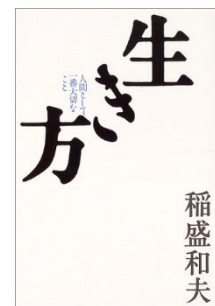
『生き方 人間として一番大切なこと』
稲盛和夫著 サンマーク出版 【請求記号：159/I53】

「自分は何のために頑張っているのだろう…」等々、どんな生き方をしたいか悩んでいる人、現状の自分を変えたい人、自分の内面を成長させたい人は、必見の書です。

稲盛和夫氏(1932-2022年)は、言わずと知れた伝説の経営者です(京セラ・KDDIの創業者、破綻した日本航空再建など)。この稲盛氏が、人間として一番大切なことは「心(魂)を磨くこと」だと述べられています。感謝を忘れず、人に喜んでもらえることをどれだけできるのかなど、魂を磨くことの大切さをご自身の経験をふまえながら本書で説明されています。また、稲盛氏は、「人格」は、「性格(人間が生まれながらにして持っているもの)+哲学(人生を歩む過程で学び身につけていくもの)」で成立するとして、どのような哲学に基づいて人生を歩むかによって人格は大きく異なるものとなるため、その人格を磨くために必要となる哲学を本書で紹介されています。

私自身も本書を幾度となく読む度に、自分の中に確固たる「哲学」を持つことの重要性を感じ、この先も“魂を磨き続けたい”と強く感じているところです。

人生に 迷ったときの 指南書



思考・意識を刺激する

「人の意見には流されない！
では自分の脳には？」
…認知バイアスを知ろう



東京柔道整復学科
小黒 正幸 先生

『自分では気づかない、ココロの盲点』
池谷裕二著 講談社 【請求記号：141.51/133】



以前、この冊子で私は『選択の科学』という本を紹介した。「人はどのように選択するか」を科学的に論じた著書である。その文中で、「私たちは感情的・精神的代償を支払っても、選択し続けなければならない。なぜなら選択することは新しい扉を開けて、未来を創造することにほかならないからである。」と書いた。さらに、私たちは時に「選択させられている」のではないかと、との疑問に対し、『アリエリー教授の「行動経済学」入門』という本を紹介し、行動経済学の観点から、自らの行動や選択が、自分の意識だけではなされていないことを認識する必要があると書いた。



『選択の科学』
シーナ・アイエンガー著 文藝春秋
【請求記号：361.4/197】

今回は、その選択が、自分の脳にそなわった「勘違い」する思考回路、「認知バイアス」によって、「無意識のうちに勘違い、判断ミスを引き起こす」ことにより、「思考が錯覚して選択してしまっている」ことについて書かれた本を紹介したい。

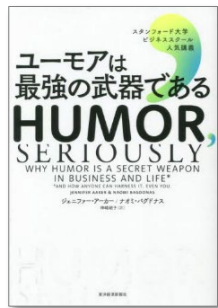
認知バイアスとは、誰もが持っている「思考の偏り」や「思い込み」によって、合理的ではない判断をしてしまうという行動経済学と心理学が融合したような学問の用語である。こういって、とても難しい学術書をイメージするかもしれないが、本書は、クイズ形式で数々の認知バイアスを引き起こす身近な例を紹介していくという読みやすい本である。クイズ形式の本なので、内容を紹介してしまうとつまらないが、1つ例をあげると、「物事がうまくいった時は自分が頑張ったからだと思ひ、うまくいかない時は周りや環境のせいだと思う」ことが誰でもあるだろう。これも「自己奉仕バイアス」という認知バイアスの1つであり、冷静な分析、選択を妨げる。こうしたことを数々の実験・研究を紹介しながら、わかりやすく自らの認知バイアスについて認識させてくれる。逆に専門書ではないので学術的にはもの足りないかもしれないが、各事例について全て論文などの出典が記載されているため、より専門的に学びたいければ、そこから調べることができる。



『アリエリー教授の「行動経済学」入門』
ダン・アリエリー著 早川書房
【請求記号：331/A71】

読んだからといって認知バイアスを回避し、正しい選択ができるようになるわけではないが、脳にそのような「クセ」があることを知っておくことは、人生の様々な場面における選択に役立つはずである。

「ユーモア」を 「真面目に」 追究した人たちの本



東京理学療法学科
小山 優美子 先生



『ユーモアは最強の武器である』

ジェニファー・アーカー, ナオミ・バグドナス著 神崎朗子訳
東洋経済新報社 【請求記号：336.49/A11】

書店のビジネス書が並ぶ一角で発見し、その場に合わない意外性のあるタイトルにひかれて手に取りました。ちなみに原著は米国のもので、本書で例としてでてるユーモアの半分は、日本人の私にとっては何が面白いや…とさっぱり。ユーモアの感覚は国や文化が違えば異なる、と改めて感じました。

とはいえ、人がユーモアを求める理由や、ユーモアが自身だけでなく他者の心、ひいては集団にもたらす影響、スベらないシラけないユーモアに必要な要素、そこには万国共通、普遍的なものがある気がします。本書はユーモアを活用した様々な人(時には大失敗した人)の例をあげながらそれを説いています。分刻みのスケジュールで忙しく働いているであろう超大企業でも、堅苦しい雰囲気しか漂わないイメージの首脳会談ですらも、裏にはユーモアが溢れているというのだから、ユーモアは社会を豊かにし、世界を平和にする最強の武器なのかもしれません。

柔道整復学科
舟喜 晶子 先生



『ものがわかるということ』

養老孟司著 祥伝社 【請求記号：914.6/Y84】

「ものがわかるとはどういうことでしょうか？」

養老孟司氏は解剖学者らしく、身体に着目して説明しています。冒頭に“若いころは勉強すればなんでも「わかる」と思っていた。”とあります。虫取り網の使い方を勉強した(読めた)としても、上手に虫を捕まえられるかはわかりません。五感を駆使してわかろうとしなければ本当にわかったことにはならないし、それでもわかっていないかもしれないのです。わからないからやってみる。実際に体験する。それが実験です。3章には世間や他人との付き合い方について書かれています。3人が同じリンゴを見ていても3人それぞれ見え方が違うのに、私たちはそれを「リンゴ」という1つの概念に括ります。でも、私が見ている「リンゴ」とあなたが見ている「リンゴ」は違うのです。

私が学生のころにこの本と出会っていたら、もっと広い視野をもって社会に飛び出せたかもしれません。こんな解釈もあるんだなあ〜くらいの気持ちで読んでみてください。

「わかる」って なんだろう？



(前ページからつづき)

思考・意識を刺激する

教職センター
稲川 健太郎 先生



『無用の効用』

ヌッチョ・オルディネ著 栗原俊秀訳
河出書房新社 【請求記号：002/071】

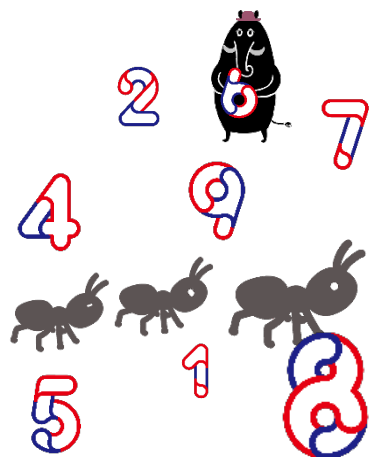
「すぐ役に立つ」、「効率よくできる」—今の世の中に溢れかえっている。そんな急に「現世御利益」ばかり追い求めてどうするのだろうか。实用本位だけが忙しい現代人にとっての価値になってしまったのか。「ひとは生まれながらにして知ることを欲する」(アリストテレス『形而上学』)。「タイパ」や現世御利益はさておいて「知る」を楽しむアリストテレスは、キノコのような現代人(サン・テクジュベリ『星の王子さま』参照)にはもう相手にされないのだろうか。

大学もかつては、外国語を二つ履修したり、人文、社会、自然の各領域の科目の履修が必須だったり、のんびりと時間が流れ、ゆったりと勉強していたような気がする。「コスパよく単位をそろえる」、「最低限の努力で資格を取得する」—これが大学での学びだと刷り込まれてしまっているその君! 日頃のルーティンを忘れ『無用の効用』を読んでみよう。古今の書物—ヨーロッパの作品が主流だが—を材料にして、実用にとらわれない知識が、実は、どのように「役に立つ」のかを論じている。「一軒の家の中で、すぐに役立つ場所は便所である。同様に…(一部改変)」とでもいうような挑発的な言辞があるのも楽しい。

「なんだ、ブンケイの本か」と上から目線の理系の君には、ポアンカレが「数学は何の役に立つのか」という問いに、「あなたたちは、生きようと欲するあまり生きる目的を失っている」という古代ローマの詩の一節を引用して応じていることを指摘しておこう。

ネットやらSNSやらの「いいね」に振り回され、「エコーチェンバー現象」で特徴付けられる閉鎖空間にどっぷり浸かってしまわずに、いろいろな考え方に接して、自分自身で時間をかけて考え、変革を起こしてみたらどうだろうか。Festina lente! 「ゆっくり、急げ!」

「すぐ役に立つ」 に抗して



よりよい「人生」を 自分の手で 作り上げていこう！



看護学科
園山 真由美 先生



『生き方 人間として一番大切なこと』
稲盛和夫著 サンマーク出版 【請求記号：159/I53】

この本は、京セラ・KDDIを設立し、その後日航の会長として活躍した稲盛和夫氏の著書である。よりよく生きるためには、物事に対する「考え方」が大事であると述べており、人生・仕事の結果＝能力×熱意×考え方という方程式を紹介している。

能力と熱意は0～100点までがつけられる。かけ算なので、能力が高なくても、そのことを自覚して、熱意を持っていれば、よい結果が得られる。考え方は、-100から+100点までのため、能力と熱意に恵まれていても考え方が間違っていると、結果がマイナスにしかならない。プラス方向の考え方とは、前向きで建設的であること、感謝の心を持ち、協調性を有していること、善意に満ち、思いやりがあり、優しい心を持っていることなどである。

多くの人が様々な出来事に遭遇した時、考え方がマイナス方向に向かってしまうのではないだろうか。しかし、考え方で人生が変わる。皆さんも、この本を手にしてよりよく生きるヒントを得よう！

学校教育学科
米田 巖根 先生

『アリになった数学者』
森田真生文 脇阪克二絵
福音館書店 【請求記号：410/Mo66】



数を通じて 人間を知る

「1+1」は？と聞かれたら、皆さんは何を思うでしょうか？

小学一年生でも答えられる内容ですが、この問題は、2つの深い意味を帯びています。それは、①なぜ「1+1=2」となるのか？という問いと、②「1」という数はどういう意味なのか？の2つです。本書は、後者を対象としながら、我々が日常的にイメージしている数字の「意味」について、突如アリになってしまった数学者という視点で、身体論も踏まえて数の概念について「数学」していきます。作品は絵本形式で示されており、難解な数式、および、ややこしい証明はありません。しかしながら、きちんと「数学的な考え」が明確に示されています。

我々は日常的に10個を一塊として考えていく「10進法」を用いています。この作品は、それがなぜ用いられているのか？という問いについても、きっと応えてくれると思います。

話の途中にて、主人公の「数学アリ」が、人間の身体性を帯びて形作られた「数の概念」を、仲間のアリに対して、実例を示しながら解きほぐしていく姿に、心打たれるものがあります。アリ達が数学を創っていく姿、つまり、試行錯誤を通じた「数学の構築」の奮闘劇に、読み手である皆さんが追体験されることに期待を寄せて、本書を強く推薦させていただきます。

ぜひ皆さんもアリたちの奮闘に期待してください！！



力を抜いて元気をもらう



生命科学科
高谷 光 先生

自然にまなぶ
気楽になれる考え方

『働かないアリに意義がある』

長谷川英祐著 メディアファクトリー 【請求記号：481.71/H36】

『地球の中身 何かがあるのか、何が起きているのか』

廣瀬敬著 講談社 【請求記号：450/H72】



僕から学生さん達に紹介したいのは、僕自身が「ちょっと心が疲れたな」とか「なんかモヤモヤするな」という時に読み返すと心のささくれが少し癒される対照的な2冊の本です。1冊は身の周りの小さいものの代表「アリ」についての本。もう1冊は逆に大きいものの代表「地球」についての本です。

1冊目のアリの本『働かないアリに意義がある』は、組織や集団に仕事をしない人が必ずいることの根拠として引き合いに出されることが多いので、聞いたことがある、ネットで見たことがあるという人も多いと思います。アリの集団に必ず一定数働かずサボっている働きアリが存在するのはなぜか？を研究している生物学者の視点から、アリ社会を人間社会に置き換えた考察が随所に書かれています。クラスで、部活で、バイト先で「あの人がなんで仕事しないのかな？」とモヤモヤした時、社会人になって「働かないオジサン」に出会った時に、本書の内容を思い出して考えを巡らせると、少しはスッキリするかもしれません（※保証の限りにありません。もしかしたら、もっとモヤモヤするかもしれません。その時はあしからず。）

2冊目の『地球の中身』は、地球の中身（成分）から地球史や地球環境、生命に関する「なぜ？なに？」を解き明かそうというスケールの大きな本です。大きな地球のほとんど、80パーセント以上（体積）がブリッジマナイトという耳慣れない名前の鉱物でできているとか、地球の核は超巨大な鉄の塊でしかも外側は液体で流動してるとか、46億年前の地球誕生直後に火星サイズの原始惑星が地球にぶつかるジャイアント・インパクトがあって、そのおかげで海ができたとか、ちょっと想像できないくらい大きくて、長い時間の話が書かれています。こういう長大な話と比べると人間と人間社会のいかに小さなことか、身の回りの人間関係の悩みなど取るに足らないちっぽけなものに思えて「小さなことでクヨクヨとせず、明日から頑張ろう！」という気持ちになれます（※少なくとも僕は）。

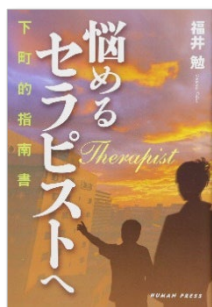
どちらの本もAudibleでも提供されていて混んだ電車でも、歩きながら、家事しながら聴くことができるので、興味がある人はぜひ読んで（聴いて）みてください。

何かに迷ったら
 何度でも
 読み返してみてください

理学療法学科
 渡邊 修司 先生



『悩めるセラピストへ 下町的指南書』
 福井勉著 ヒューマン・プレス 【請求記号：498.14/F76】



理学療法士はヒトとかかわる仕事という性質上、患者様や利用者様、そのご家族はもちろん、医師や看護師など、多種多様な方々とコミュニケーションをとる機会があり、様々なストレスを感じることも多くあります。加えて、医療に携わる仕事であるため、様々な自己研鑽、生涯学習に励む姿勢が求められる場面も多くあり、この点に関してもある種のストレスを感じてしまう場面もあります。

こちらの書籍では「理学療法士などの若手のセラピスト」に向けて、日々の様々なストレスに対する肩の力の抜き方や日々の業務への気構えなどについて、著者の人柄がわかるような読みやすい表現で記載されています。読んでいる際には頼れる上司に親身に相談に乗っていただいているような不思議な感覚を覚え、読了後にはまた明日から頑張ろう、という気持ちになれます。書籍名より、「悩めるセラピストへ」とされていますが、医療従事者に限定せず、所謂「若手」の皆様には是非読んでいただきたい書籍です。

図書館職員が元気をもらった本



『線路は続くよどこまでも』
 山田千紘著
 廣済堂出版
 【請求記号：289.1/Y19】



『本日は、お日柄もよく』
 原田マハ著
 徳間書店
 【請求記号：913.6/H32】



『自炊力』
 白央篤司著
 光文社
 【請求記号：596/H19】



『ザ・ランド・オブ・ストーリーズ』
 クリス・コルフアー著
 平凡社
 【請求記号：933.7/C84/1~6】



『図書館戦争』
 有川浩著
 角川書店
 【請求記号：913.6/A71/1~6】



『こころ彩る徒然草』
 木村耕一著
 1万年堂出版
 【請求記号：914.45/K139】



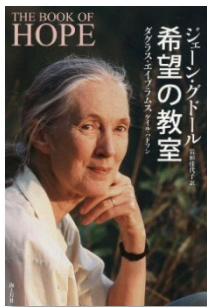
『エールは消えない』
 志村季世恵著
 婦人之友社
 【請求記号：146.8/Sh56】



『北欧こじらせ日記』
 週末北欧部 chika 著
 世界文化ブックス
 【請求記号：293.892/Sh99】

明日への希望

それぞれの希望を
見つけてほしい



自然環境学科
下岡 ゆき子 先生



『希望の教室』

ジェーン・グドール, ダグラス・エイブラムス著 岩田佳代子訳
海と月社 【請求記号：519.04/G65】

チンパンジーが小枝を使ってアリの釣って食べる“道具使用”をすることは皆さんもご存知かと思いますが、それを1960年代に発見されたのが、チンパンジー研究のパイオニア、ジェーン・グドールさんです。この本では、著者とジェーンさんとの対話を通して、現在89歳のジェーンさんがこれまでの様々な局面でどのようなことを考えてこられたのか、今思うことは何かを率直に語られています。

ジェーンさんは研究者として王道を歩んでこられた方ではありません。経済的な理由から大学に進学せず、イギリスで高卒の秘書として働いていました。しかし動物のことを知りたい!という夢を捨てられず、タンザニア滞在中の人類学者、ルイス・リーキー博士を訪ね、リーキー博士の秘書として働く中で、野生の勘を見出されます。まだ誰もやったことのない野生チンパンジーの行動や生態の調査を開始することになりますが、若い女性が単身、アフリカの森で調査をすることについてイギリス政府から許可が下りず、なんと、実のお母様にアフリカに同行してもらうことになって、ようやく許可が下りたそうです。

チンパンジー研究で数々の発見を成し遂げた後、ジェーンさんはチンパンジーの頭数が急激に減少していることを知り、保全活動を始めます。チンパンジーが暮らす森を守るためには、地域住民の生活を確保することが最優先だと考えたジェーンさんは、人々が貧困を脱し、自立した生活を行うきっかけを作るために、少額融資のシステムを構築されました。1991年には Roots & Shoots という若者たちの夢の実現を応援するプログラムを始め、今年年間300日は世界中で講演活動をされています。今年7月4日には帝京科学大学東京西キャンパスでも講演して頂きました。オンラインで視聴された方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

89歳の今もお精力的に発信を続けるジェーンさんの姿に、私も、まだまだできることがたくさんある!と背中を押してもらったように感じました。学生の皆さんも、できることなんてない、なんて諦めずに、自分の「好き」を大切にもらいたいと思います。そして、ワクワクするような夢と希望を見つけてもらえたら、と思います。

友だちとは、
属性や能力に関わりなく
あなたとつきあって
くれる人



『心を病んだらいけないの?』
齋藤環ほか著 新潮社
【請求記号：493.7/Sa25】



学校教育学科
永沼 充 先生

『知性は死なない 平成の鬱をこえて』
與那覇潤著 文藝春秋 【請求記号：916/Y82】

双極性障害 II 型の診断を受けて入院し、2年間のデイケアでのリハビリにより、日常会話もままならない状態から帰還した元大学准教授が本書の著者である。あるシンポジウムで歯切れよい発言をするシンポジストがいて気になりネット検索してみたのが本書に出会ったきっかけである。進学校から東大の学部・大学院という、所謂「エリートコース」を進んだ。病気から復帰後、結果的に10年間勤めた大学を辞したものの、病気の前も後も新進気鋭の歴史学者である。分かりやすいことばとたとえを使って難しいことを議論するスタイルが新鮮に映る。

平成の30年間で「知性と反知性」、「言語と身体」という視点から総括しているのが本書であるが、著者の経験から「うつ」に関しても章を割いている。第2章（「うつ」に関する10の誤解）や最終章（病気からみつけた生きかた）だけでも読むことができよう。自らの体験を研究者の目で捉えた、いわゆる当事者研究ともいえる。精神科医の齋藤環氏との共著による『心を病んだらいけないの?』も併せて読みたい。



教職センター
大場 卓 先生

『リト』
山元加津子作・絵 モナ森出版 【請求記号：913.8/Y31】

このところコロナ感染症への対応も変わり、新しい展開を迎えています。コロナ禍と言われた3年余り、今までに経験のない出来事がたくさんありました。とりわけ、本年度卒業する4年生は入学式もなかったと聞いています。そんな時に出会った本が山元加津子さんの『リト』という本です。山元さんは古い友人ですが、長く養護学校等で素敵な子どもたちと共に過ごしてきた、優しく、強く、弱く、不思議な感性を持ち、たくさんの人を惹きつける人です。

そんな彼女がコロナ禍の世の中で書いたのがこの本です。「リト」とは主人公の子犬の名前です。リトは生まれてから様々な困難と出会います。本の中でも流行り病が人々を苦しめます。そんな中、リトはかけがえないものを求めて生きていきます。物語は「どんなことも、いつかいい日のためにある。怖い流行り病さえも」という言葉で結ばれています。明日への希望を持ちながら、ぜひ手にとって読んでみてください。

私たちは、
コロナウイルスの蔓延から
何を学ぶべきか



外国を知る

「密偵」をはみ出し
中東ユーラシア大陸を
日本人エクスプローラがいく！



医療福祉学科
山田 健司 先生

『天路の旅人』
沢木耕太郎著 新潮社 【請求記号：289.1/N83】

『「中国」の形成 現代への展望』
岡本隆司著 岩波書店 【請求記号：222/C62/5】

『テロルの決算』『深夜特急』などで知られるノンフィクションの名手、久々の異色長編。第二次世界大戦終期、中国の深西域にいたる密行(密偵と称している)を敢行した西川一三の著書『秘境西域八年の潜行』を底本にして、沢木流で仕上げた取材記?である。

冒険譚を十分味わえるが、本書の滋味はそこではない。圧倒的なのは、現代「中国」に通じる西域エリアの超リアルだ。起死回生のエスノメソドロジー紀行は、圧巻。今日の新疆ウイグル自治区の人権問題も史的渦中の一場面に感ずるほど、中国西域構造の本髓を扶る視点を与えてくれるだろう。さらなる深堀りには『「中国」の形成』岡本隆司著との併読が、お勧め。

中東ユーラシア大陸に永年繰り返されてきた飽くなき民族抗争の果てに、「中国」という国の体を21世紀初頭に成している、という歴史の末端をいま目撃しているに過ぎない、この現実が目が醒めるのだ。己を省みずして驕るは久しからず、ですね。



若林正恭が カラフルなキューバを ユーモラスに表現



医療福祉学科
松永 美輝恵 先生



『表参道のセレブ犬とカバリーニャ要塞の野良犬』
若林正恭著 KADOKAWA/ 文藝春秋 【請求記号：779.14/W17】

平積みされた文庫本の山あいを眺めていた時、心と目に留まった一冊がこれ。「こ、この犬…大丈夫?!」が第一印象。タイトルにある「野良犬」側だろうと推定した。作家は若林正恭。そう、あの“若林”だ。この人の皮肉や悲哀のこもったツッコミが好き…というわけで即買した。

若林氏がわずかな休日を楽しむため、弾丸的に向かった先はキューバ。キューバ人の陽気なテンションについていこうと腹をくくった彼の目の前に現れたガイドは、人見知りだった。いい感じだ。さて、表紙の犬はカバリーニャ要塞付近で見られた犬で、彼自身が撮影したらしい。「あの犬は手厚い庇護を受けていない。観光客に取り入って餌を貰っている。そして、少し汚れている。だけれども、自由だ。誰かに飼いならされるより自由と貧しさを選んでいた。ほくの幻想だろうか？それとも、キューバだろうか？」この一文が気に入った。そのほかモンゴル編、アイスランド編もある。そろそろ“外”の空気に触れたいなあ。

学校教育学科
馬場 千秋 先生



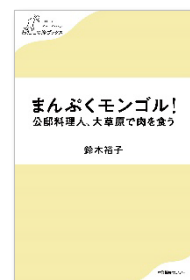
『まんぷくモンゴル！ 公邸料理人、大草原で肉を食う』
鈴木裕子著 産業編集センター 【請求記号：292.27/Su96】

モンゴルと聞くと、「遊牧」「大草原」「ゲル」「相撲」などのイメージがあるのではないのでしょうか。本書は、保育園の給食のおばちゃんから在モンゴル日本国大使館公邸料理人（著者紹介より）になり、モンゴルで3年間を過ごした著者が、モンゴルの人々の食事と生活について紹介しています。

モンゴルでは、食といえば「肉」であり、モンゴル五畜と呼ばれる羊・山羊・牛・馬・ラクダの肉が食されています。これは、遊牧をするモンゴル人と一緒に自らの足でついていくことができるからです。一方、鳥と豚は、飼うことにより住まいや餌を与えるために定住をしなくてはならず、餌代も割高になるという、モンゴル独特の環境から、あまり食されてきていません。定住することが当たり前だと考えている日本人には想像することができないこのような生活実態を、本書ではモンゴルの食文化を通じて知ることができます。

また、著者が、人々との出会いやきっかけ、人生の転機を大切にしながら日々を謳歌していることが本書から伝わってくると思います。実は著者の鈴木氏と私は中学・高校で同級生でした。高校卒業後、方向は違いますが、鈴木氏も私も、自分の好きなことを仕事にしています。皆さんも出会いや転機を活かしながら、自分の好きなことができる人生を送ってください。

人生には
何があるか
わからないから
面白い



専門を語る

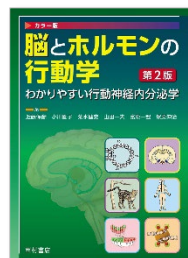


アニマルサイエンス学科
近藤 保彦 先生

ホルモンってこんなに面白い
—行動を決定するホルモン

『脳とホルモンの行動学 わかりやすい行動神経内分泌学』
近藤保彦ほか編 西村書店 【請求記号：491.37/Ko73】

『動物心理学入門 動物行動研究から探るヒトのこころの世界』
小川園子ほか編 有斐閣 【請求記号：481.78/O24】



ちょっと手前味噌になってしまうのですが、ホルモンが我々ヒトを含む動物の行動にいかに大きな影響を与えているかを解説した2冊を紹介いたします。

1冊目は、2010年に西村書店から出版された『脳とホルモンの行動学—行動神経内分泌学への招待』の改訂版です。構成は行動ごとに章立てし、最前線で研究している先生方に執筆をお願いしました。そして初版より10余年、ゲノム編集や遺伝子導入など技術革新があり、最新の知識を盛り込んで改訂版を出すことになりました。

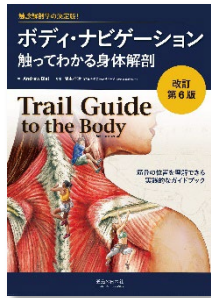
もう1冊は、日本動物心理学会監修のもと、私の研究仲間が編集したものです。高校生に動物心理学についてもっと知ってもらいたいという意図で、専門性よりも分かりやすさに重点が置かれています。動物行動における生理学的なメカニズムを解説した本となっています。私は、「『好き』って気持ちはどうして起こるの?」について解説しています。文系の方にも読みやすいのではないかと思います。





東京柔道整復学科
濱田 淳 先生

セラピスト(治療家)を 目指す学生は必見！



『ボディ・ナビゲーション 触ってわかる身体解剖』
Andrew Biel 著 阪本桂造監訳 医道の日本社
【請求記号：491.16/B41】

約20年前、柔道整復師を目指して専門学校で学びながら接骨院で研修を行っていた小生が体表解剖を理解するために手にした本が『ボディ・ナビゲーション 触ってわかる身体解剖』の初版であった。当時は学校の行き帰りの電車内や研修の休み時間などに目を通し、同級生や接骨院の同僚の身体を利用して触診を繰り返し行った経験が思い出され、今でも小生が自宅で大事に保管している1冊である。

体表と深部の筋骨格構造の関係を理解するための触診を学べる解剖学書として大変高い評価を得ている本書だが、2023年1月に改訂第6版として新たに改訂刊行された。ページ数も大幅に増え、全カラーページ(初版、改訂版は2色刷り)と生まれ変わり、大変見やすく、より理解しやすく、コラムなども面白くなったと感じる。今後、手技療法をマスターしたいと考える学生は、まずは手にすべき必読書(バイブル)であるとお勧めしたい。



アニマルサイエンス学科
野田 英樹 先生

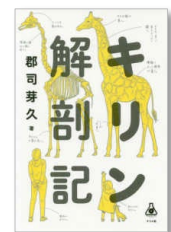
キリンを軸に 自分の体について知る

『キリンのひづめ、ヒトの指 比べてわかる生き物の進化』
郡司芽久著 NHK出版 【請求記号：481.1/G94】

以前当学で「動物解剖学」をご担当されていたキリン研究者の先生が書かれた一冊です。動物園で何気なく見ている様々な動物の不思議な体のつくりや行動には、すべて理由があるということを再確認させてくれます。同時に、私たちヒトの体の各パーツも、それぞれが今ある環境に最適になるように進化してきているんだ、ということを知りやすく解説しています。

著者が大好きなキリンを軸に、動物の体について解説が進んでいくのですが、取り上げられる動物は多種多様で、この本を読んでから動物園を訪れてみると、きっと動物の見方や、観察時の目の付け所が変わると思います。

キリンについて(特に首の骨について)さらに深く知りたい人は、前著『キリン解剖記』も読まれるとよいでしょう。著者のキリンへの深い愛情とキリン解剖学者への道開拓の様子が伝わってきます。



『キリン解剖記』
郡司芽久著 ナツメ社
【請求記号：489.87/G94】

(前ページからつづき)

専門を語る

動物と人の接点、 お互いの幸せを考える



アニマルサイエンス学科
岩花 倫生 先生



『動物園を考える 日本と世界の違いを超えて』
佐渡友陽一著 東京大学出版会 【請求記号：480.76/Sa13】

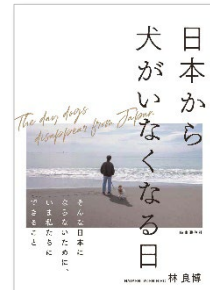
私の動物園デビューは遅く、小学生の時に、みさき公園(大阪府泉南郡岬町)だったと記憶しております。ゾウやキリンの大きさに驚き、また、彼らが何を食べているのかに強い関心を抱きました。それと同時に独特な臭気も鮮明に記憶に残り、図鑑でゾウやキリンを見るだけで臭いの記憶が蘇りました。皆様にとって動物園はどのような存在でしょうか？

本書は日本のみならず世界の動物園の歴史にも触れ、動物園の役割などについて各国の考え方や経緯が異なることが紹介されています。第1章から「動物園と動物園学の課題」というチャレンジングな表題にも惹かれました。この書を読まれ、休暇中にあちこちの動物園を巡ってみると新しい見方で新しい発見ができるのではないのでしょうか？

『日本から犬がいなくなる日』

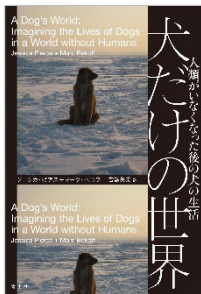
林良博著 時事通信社 【請求記号：645.6/H48】

人口が減り、少子高齢化と言われて久しいのですが、犬も同様に2008年をピーク(約1310万頭)に減少しております。そして、減少傾向は継続しており、2021年にはピーク時から46%も減少しました。この数字は地方自治体で登録されている数を厚生労働省が集計した数字とは異なりますが、傾向は同じです。本書はこれらの事実から危機感をあおる、あるいは減少の原因を追及するだけではなく、伴侶(パートナー)として犬とともに過ごす豊かな生活や、さらに犬の幸せについても言及されています。



『犬だけの世界 人類がいなくなった後の犬の生活』

ジェシカ・ピアス, マーク・ベコフ著 吉嶺英美訳 青土社
【請求記号：489.56/P62】



「人類がいなくなったら、イヌはどうなるのだろうか?」という思考実験から記述されたものです。難しい表現をすれば進化的思考実験というそうです。皆様はどう思いますか?犬は生き残れるだろうか? 野生化し、オオカミのようになるのではないか? 大型犬や短頭種は存続するのか? などなど、興味はつきません。日本で野良犬はほとんどいなくなりました。野良犬であっても、食料は人から供給されていたのではないのでしょうか? この本は前述の『日本から犬がいなくなる日』の著者が引用していたもので、様々な角度から思考実験で検証しています。

私が興味をもったのは8章の「イヌは人間がいなくても幸せなのか」という表題です。人がいないメリットとデメリットを列挙し、考察されています。結論がある課題ではありませんが、犬や犬とともに暮らす人の幸せを考えるにはとても面白い内容だと思います。

人間の尊厳



学校教育学科
永沼 充 先生

「私たち」と 「あの人たち」の死を 同じように扱う



『顔のない遭難者たち 地中海に沈む移民・難民の「尊厳」』
クリスティーナ・カッターネオ著 栗原俊秀訳 晶文社
【請求記号：498.92/C26】

本書を手にとった理由は、犠牲者の生きた証が死者〇〇名として扱われてしまった3.11 震災の際のやるせない思いに通じるところがあったからである。

移民の海難事故では犠牲者自体が同定困難という事情が加わる。著者はミラノ大学の犯罪法医学者で、2つの大きな移民船沈没事故で犠牲者同定に関わった記録でもある。本書では随所に PM と AM という言葉が出てくる。post-mortem、ante-mortem、すなわち、死後の情報と生前の情報である。つまり、検死の際のありとあらゆる個人情報のデータ(PM)と、もしかしたらという「曖昧な喪失」に苦しめられる親族関係者が持つ個人情報(AM)である。両者のデータベースを突き合わせて一致が見られたとき、犠牲者に名前が与えられ、生者に悲しみと安堵が与えられる。大学、研究所、市役所、警察、消防から海軍まで組織の枠を超えた協力体制はイタリアモデルとして国連総会にも報告された。

海底から引き揚げられ、腐敗が進んで異臭を放ち、どろどろになった遺体を引き起こし、細部まで検分する描写が随所にあるが、悪寒を感じさせないのは、著者のゆるぎない信念が底流にあるからであろう。それは、欧州を二分していた移民の受け入れ可否論争から超越して、人間の尊厳をいかにして守るかという科学者としての信念である。



幼児保育学科
田口 直子 先生

『宇喜多の捨て嫁』
木下昌輝著 文藝春秋 【請求記号：913.6/Ki46】

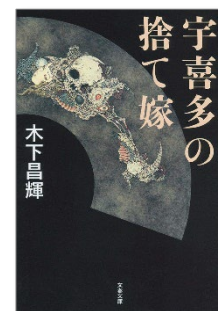
どんなヒーローが大衆に好まれるのかというのは、時代を映す鏡のようで興味深いものです。最近の歴史小説では、勧善懲悪とか主家に尽くすというような単純明快なヒーローよりもいわゆる梟雄、現代風に言うと強いが悪くもあるヒーローがとりあげられることが多くなってきているのは、気のせいではないでしょう。

さて、その流行り?の梟雄ですが戦国三大梟雄といわれているのが、マムシの道三こと斎藤道三、爆死の松永久秀、そして捨て嫁の宇喜多直家です。

『宇喜多の捨て嫁』では女は政略結婚の道具である戦国時代にもかかわらず、さらにその上をいくほど酷いエピソードが描かれます。その後、各所で立場をかえた人々の心の動きと共に、さらりとひどすぎるエピソードの理由が明かされ、こちらも哀しく丁寧に描かれます。

日常生活において酷いエピソードに遭遇した時にも怒りにまかせず「なんでそんなことするんだろう」と立ち止まり、人の心の動きを汲むきっかけになるような良書です。

「捨て嫁」って いくらなんでもひどい



きっかけはここに！？

人間的、人格的に
優れた人は、
自然と見た目が
よくなる。



教職センター
杉浦 芳則 先生



『やっぱり見た目が9割』
竹内一郎著 新潮社 【請求記号：361.45/Ta67】

37年前に、教員としての第一歩を踏んだ私は、大学を卒業したばかりの一年目でした。初めての生徒への自己紹介、そして保護者へのあいさつ。生徒や保護者のまなざしは、大勢の人前で話す機会のなかった私を丸裸にし、今考えているすべてがお見通しであるかのようでした。当時、初対面の私に対する見た目(非言語情報)を直接聞く機会はありませんでしたが、生徒からは「もっと怖い先生かと思っていた」だとか、保護者からは「老けて見えた」という第一印象は、だいぶ日がたってから聞くことになりました。

『「見た目」とは、容姿だけをさしているのではない。言語情報以外の情報である「非言語情報」を象徴させる言葉として述べている。身体、表情、動作、色、音、匂いなど、すべてを「見た目」と捉えている。私たちは、直感的に「この人は優しそうだ」とか「信頼できそう」などと判断している。当然、その後の様々な「非言語情報」により修正することもあるが、最初の一瞬で好意を持つかどうかはかなり決まると言える。』(筆者)

私は、教員生活の終わりに近い9年間において、教員採用試験の面接官を担当してきました。「面接室に入った瞬間の第一印象がそのまま結果に結びつくことが多い」と、この本で述べられていますが、まさに同じ思いを持っています。その人の持つ考え方や価値観が、どうしてもその人の「見た目」に現れるのではないのでしょうか。非言語コミュニケーションが大切となる教育現場で働いてきた私としては、採用試験を受ける前に大学生の皆さんに目を通してほしい本の一冊と言えます。

ちなみに、私が初めて生徒や保護者と会ったときに思われていた第一印象は、その後の日々の「非言語情報」を含めたコミュニケーションによって、第一印象を変えたということを、一言付け加えておきます。



くちびるに歌を。
ポケットに新書を。
心に太陽を。



アニマルサイエンス学科
今野 晃嗣 先生



『農家はもっと減っていい 農業の「常識」はウソだらけ』
久松達央著 光文社 【請求記号：611.7/H76】

私の高校の国語科教員の浅沼先生が、「くちびるに歌を。ポケットに新書を。心に太陽を。」とおっしゃっていたのを、たまに思い出します。恥ずかしながら、いまググって調べてみたら、この言葉はドイツの詩人の一節をもじったものようです。先生のメッセージは、新書を読んで心を豊かに、ということ。新書とよばれるジャンルは専門分野の入門書として位置づけられ、論理的で簡潔な文章で書かれているのが特徴です。たしかに、国語力をつけるためにも、教養を身につけるためにも、最新の知識を得るためにも、新書はうってつけだと思います。

そんな助言があったからなのか、わたしは新書を読むのが好きになりました。何よりも、新書はいろんな分野の知識を手軽につまみぐいできます。それから、値段もだいたい1,000円以内ですし、ページ数も多くて200~300です。最近読んでおもしろかった新書は、久松達央さんの『農家はもっと減っていい』です。日本の農業の常識に忖度なしでどんどん切り込んでいく筆致はまさに痛快です。まあ、なんでもいいので、これからはみなさん、ぜひ、ポケットに新書を。

総合教育センター
藤原 敬介 先生



『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海外に行ったことがないままルーマニア語の小説家になった話』
済東鉄腸著 左右社 【請求記号：979.1/Sa25】

本書は、千葉の「引きこもり」がルーマニア語を習得し、同言語で小説を執筆し出版するまでの一大叙事詩です。

韓流の「推し活」をする人々が韓国語に「沼」るように、著者はルーマニア映画に刺激を受けてルーマニア語の世界に「沼」りました。日々の学習は、SNSを活用してルーマニア人と交流すること、Netflixで字幕付きのルーマニア映画を視聴すること、オンライン辞書を駆使してルーマニア語作文を書き、SNSでしりあったルーマニア人に添削してもらうことなど、自由で開放的な学びの場ですめられています。教室での授業や試験はありません。母語話者のような完璧さを追求するのではなく、あくまで「ことばの移民」として日本語話者ならではの「日系ルーマニア語」を生み出すことに情熱を注いでいます。

本書は、外国語学習がいかに自身の視野をひろげ、あらたな世界をひらく可能性を秘めているかを実感させる内容となっています。読者一人ひとりが自分なりの「ルーマニア」を見つけるきっかけとなることを期待しています。

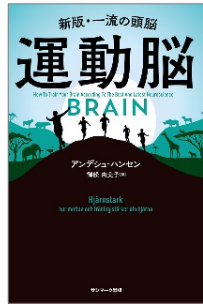
ルーマニア愛と
語学オタクの
悪魔結合



(前ページからつづき)

きっかけはここに！？

脳は
身体を動かすことで
その威力を発揮する
器官らしい。



作業療法学科
長谷川 辰男 先生



『運動脳』
アンデシュ・ハンセン著 御船由美子訳 サンマーク出版
【請求記号：491.371/H29】

『運動脳』は、運動が脳に与える効果について書かれた本です。この本では、有酸素運動で前頭葉は大きくなること、海馬の細胞が増えることなどが紹介されています。また、ストレスやうつを改善する方法、集中力を高める方法、記憶力を高める方法なども紹介されています。そして、その内容は研究論文に基づくものです。すべて参考文献として掲載し、運動が脳におよぼす影響について、もっと踏み込んで詳細に知りたい場合は、PDFファイルをダウンロードできるURLが掲載されています。

この本は、運動をテーマにした本ですので、日頃から運動習慣のある方が手に取りやすい一冊かと思います。しかし、次のような方にもおすすめで読んで頂きたいです。運動習慣をつけたいけど、なかなかモチベーションが続かない方、また、メンタル面、仕事や勉強等のパフォーマンスを上げたい方にとってもおすすめの1冊です。

学校教育学科
馬場 千秋 先生



『大人の英語発音講座』
清水あつ子[ほか]著 研究社
【請求記号：831.1/Sh49】

「英語が話せるようになりたい」と思っている人は多いでしょう。しかし、そのような人の中には「英語が聞き取れない」と嘆いている人も一定数いると思います。本書は、英語学習をしているけれど、「上手く発音できない」「聞き取れない」という人の悩みについての解決策が紹介されています。

英語の音の特徴として、連続する音がつながったり、混ざりあったりしています。目で英文を見ると理解できるのに、聞き取れないのは、このような特徴を知らないことが要因として挙げられます。本書の中で「メイディニタリー」という例が挙げられていますが、これは made in Italy となります。つながるとどのような音になるのかを知り、発音ができるようになると、上手く聞き取れることができるのです。

この他、英語独特のリズム、母音と子音の発音の方法、綴り字と読み方のルールであるフォニックス、発音記号や方言などについても触れられています。

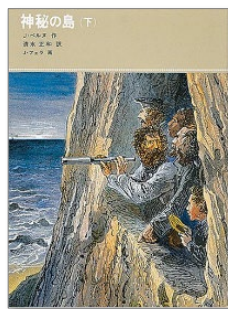
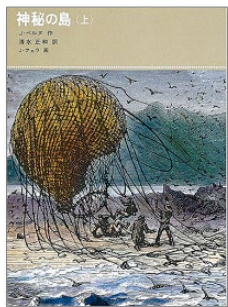
本書では、英語の聞き取りと発音について、英語を学習する目的別に何をどのくらい勉強すればよいのかという疑問にも答えてくれています。また、レベル別の練習法も紹介されています。音声をダウンロードすることもできますので、英語の得意不得意にかかわらず、英語の聞き取りと発音を練習したい、という人は是非、本書を手にとってみてください。

英語は
発音できれば
聞き取れる！



小説・文学

学びや協働に 向かわせる仕掛け



教職センター
寝占 真翔 先生



『神秘の島』

J.ベルヌ作 清水正和訳 J.フェラ画 福音館書店
【請求記号：953.6/V62/1～2】

大凡のあらすじは次のような感じです。

「技師、技師の召使、新聞記者、水夫、少年の5人の男が、気球で戦地からの脱出を試みますが、無人島に不時着してしまいます。彼らは、生き延びるために学び、各々の持っている知識・技能を生かして協力しながら数々の困難を乗り越えていきます。」

自分がこの本に出会ったのは小学校低学年の時でした。彼らの仲間になったような気がして、夢中で読んでいました。改めて読み直してみると、学生さんと一緒に学んでいる「主体的な学び」「協働的な学び」ってこういうものなのかなと思います。必要に駆られたらこどもは協力し学ぶのではないかと。しかし、現実としてこどもたちを無人島にほっぽりだす訳にはいきません。教員としてできるのは、それに近い仕掛けを作ってあげることかなと考えてしまいます。難しいですが、それができたときに、こどもたちはワクワクしながら必死に皆で学ぶのではないかと。

願わくば、学生の皆さんには私のように「テストに出すから勉強しろ」というような「必要」を提示するのではなく、この本の舞台にあるような様々な仕掛けで子どもたちの冒険心を掻き立てられる教員になってほしいと思います。



(前ページからつづき)

小説・文学

『潮騒』と 「あまちゃん」



総合教育センター
三尾 真琴 先生



『潮騒』

三島由紀夫著 新潮社 【請求記号：913.6/Mi53】

私の密かな楽しみの一つは、本年4月から始まった「あまちゃん」(2013年朝ドラ、能年玲奈・現のんがヒロイン)の再放送を日曜日にまとめて観ることである。その「あまちゃん」挿入歌「潮騒のメモリー」のサビの部分に、私がドキドキしながら読んだ『潮騒』(三島由紀夫作)の「その火を飛び越して来い。その火を飛び越してきたら」というフレーズを連想させる「来てよ、その火を飛び越えて」という歌詞がある。

『潮騒』は、伊勢湾の歌島という世間から隔絶されたような小さな島で、初江(海女)と新治(漁師)との純愛を描いた小説である。そのドキドキした場面とは、ある嵐の日、二人が待ち合わせた小屋で、新治が火を起こして眠り込んでしまい、その後にやってきた初江が濡れた服を乾かしていると、新治に裸を見られてしまい、……というシーンである。

『潮騒』におけるこの描写は、若者たちのエネルギーと情愛、倫理観との葛藤の象徴であり、また、ある種の神話的イメージを感じさせるものである。一方、「潮騒のメモリー」の歌詞は大胆にもパロディであり、これはこれで大いに楽しい。

アニマルサイエンス学科
近藤 保彦 先生



『ザリガニの鳴くところ』

ディーリア・オーエンズ著 友廣純訳
早川書房 【請求記号：933.7/O93】

著者は、カリフォルニア大学で博士号を取得した後、アフリカに移り住み、多くの論文を書いた著名な生物学者です。その彼女が70歳を前にして小説に挑みました。処女作にして世界的ベストセラー、日本でも2021年本屋大賞翻訳小説部門第1位となりました。

場面は1969年ノースカロライナ州の湿地、田舎町の人気者の青年チェイスが遺体で発見されたことに始まります。話は、殺人を疑われた少女カイヤの生い立ちを振り返る形で進みます。湿地に暮らす家族が父親のDVにより次々と去っていき、最後は父親までなくなってしまいます。しかし、カイヤは自然の中で湿地の生き物たちとたくましく生きていきます。作者は生粋の生物学者ですから、小説の中にさまざまな生き物が描写されています。読み進めると、これは本当にサスペンスなのかと思うくらいです。でも小説の最後に、そういうオチか、とやはり生物学者らしさが発揮されます。映画化もされていますが、小説の方が生き物たちの話がたくさん出てきます。

アメリカ東海岸の 大自然のなか、 ひとり住む少女と 生き物たち



どんな出来事も
人生にとって
必要な経験。
真のプラス思考とは？



柔道整復学科
富田 圭佑 先生

『運転者 未来を変える過去からの使者』
喜多川泰著 ディスカヴァー・トゥエンティワン
【請求記号：913.6/Ki63】

報われない努力はない、日常生活や書籍などで良く見聞きする言葉ですが、実際はどのようなのでしょうか。

本書は小説形式の自己啓発本であり、「運」を切り口に物語が進んでいきます。自分には運がないと感じている主人公が運とは何か、物事の捉え方や他者との関わり方、自分自身の立ち居振舞い、人生をどう考えて過ごせば良いかなどを学び、考え、実際の行動に移す物語です。我々が何らかの行動を起こすとき、無意識的あるいは意識的に「損か得か」を考えてしまいます。誰でも損はしたくないと考えますが、損とは悪なのでしょうか。考え方を調べてみると他者のためになっていることもあります。

これから社会に出ていく皆さんにとって、仕事やプライベートに役立つヒントが隠されています。煩雑な内容ではないため、短時間で読み切ることができるので、在学中に是非一度本書を手にとって、自分とは異なる考え方に触れてみてください。



こども学科
梶井 正紀 先生

『アルジャーノンに花束を』
ダニエル・キイス著 小尾芙佐訳 早川書房 【請求記号：933.7/Ke67】

『アルジャーノンに花束を』は大学院生時代に読んだ本です。当時は特別支援教育の制度改正が進められた時期でした。障害者権利条約の理念を踏まえながら障害のある子とない子が可能な限り共に教育を受けていくことができるように整備されていたこともあり、私的にはとても印象に残っている1冊です。

内容は知的障害のあるチャーリーが脳手術を受けて人並外れた記憶力や思考力を身に付けるという内容です。高い知能は獲得したが、感情などは未成熟であったことのアンバランスさがとても印象的でした。共生社会において障害のある方の自立・社会参加を支えていくためにはどのようなスキルの獲得が大切になるのか…。当時、障害児心理学の講義や演習を受けながら色々と考えていました。支援者は発達段階に寄り添いながら知識や社会性、心の成長なども支えていければと思いました。おすすめの1冊です。

知的障害と
希望の葛藤



季節を味わう

日本の季節を 味わってみる



学校教育学科
持田 尚 先生



『日本の七十二候を楽しむ 旧暦のある暮らし』
白井明大文 有賀一広絵 KADOKAWA 【請求記号：449.34/Sh81】

6月になると授業前にいつも雨が降らないか気になります。この期間は梅の実が熟し、色づく季節でもあります。我が家では青梅と氷砂糖を使って「梅シロップ」を作るのが恒例となっています。旧暦では一年を四等分した春夏秋冬の他に季節それぞれの出来事を移ろいに応じて七十二もの季節に分けられているとのこと。例えばこの時季は「梅子黄なり(うめのみきなり)」と、まさに梅の実が熟して色づく頃を表しています。その時季ならではの自然の様子と暮らしが結びついてくることを知る心地よさを感じます。

夏のごちそう、うなぎの蒲焼を食したくなる土用の時季は「鷹乃学を習う(たかわざをならう)」と呼ぶらしい。鷹のひなたちが飛ぶ方法を学ぶ頃だからだそうです。

その季節に旬を迎える野鳥や魚介類、野菜などをイラストとともに紹介してくれます。日々忙しく過ごしていると自然の変化を感じることを疎かにしてしまいます。この書籍を通じて、日本の季節を味わってみると豊かな気持ちになれます。

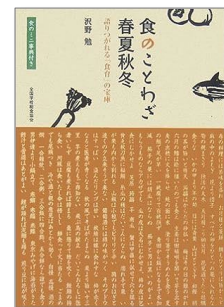
図書館
ばくもと さん



『食のことわざ春夏秋冬 語りつがれる「食育」の宝庫』
沢野勉著 全国学校給食協会 【請求記号：383.81/Sa96】

日本は四季がある国として有名だけど、最近は異常気象で四季がなくなる、なんて話を聞いたことはないかな？ でも、みんなの大好きな食べ物で四季を感じることもできるよね。この本は、四季折々の食べ物からなることわざを中心に、食についてまとめられている。ひとつひとつのことわざごとにまとめられているので、今の時期は？とか、この食べ物は？のように読むことができ、事典のように使うこともできちゃうんだ。食事に行く前に、この本から話しのネタを得て行くなんてこともできるかも?! ことわざだけでなく、その食べ物に関する小ネタも掲載されている。例えば、「誤魔化す」という言葉は、江戸時代にあった胡麻胴乱というお菓子からできたものとされているよ。なぜその言葉になったのかは、ぜひ実際に本で確認してみてください！ ちなみにばくもと好物のぼったとせいだのたまじのことは載っていなかった。残念…(涙)

食とことわざを
「いただきます」





2023年9月22日発行

帝京科学大学附属図書館 e-mail: library@ntu.ac.jp <http://www.ntu.ac.jp/library/>

千住図書館 東京都足立区千住桜木 1-11-1 TEL 03-6910-3705 FAX 03-6910-3801

東京西図書館 山梨県上野原市八ッ沢 2525 TEL 0554-63-6914 FAX 0554-63-4432